

のマスから飛び出してきては遊んでいました。

文字たちにとって、動かないでじっとしているのは、とてもたいくつなことなので、お話をしたり、とんだり、はねたり、おどったり、動きまわっていたのです。もちろん、たっくんや家の人には見つからないように、それだけは十分注意しなければなりません。ですから、文字たちはみんなが寝てしまった真夜中や、家にだれもいないときをねらって、表から飛び出してきたのです。

このあいだなんか、とんでもないことが起きてしまいました。

「チッチッチ、チチチ」

朝を知らせる鳥の鳴き声が聞こえ、あたりが明るくなってきたというのに、文字たちは表の中にもどらなかつたのです。その上、たっくんのおかあさんに、あやうく見つかりそうになって、さんざんな目にあいました。

それは、ころがるのがすきな『の』の文字が、ころころころがって遊んでいたときのことでした。『の』のことを前まえからうらやましく思っていた『め』の文字が、そのまねをしてみたのです。デンデンムシのような頭のツノを、ちょっとばかりひっこめて、なるべく『の』の形のようになるところがありました。

ところが、『の』みたいに、いつもころがっているわけではないので、どこで止まったらよいのかわからず、ろう

かに飛び出してしまいました。そして、いっきにげんかんのほうにまでころがって行ってしまったのです。

さらに、あせりまくった『め』の文字は、いきおいあまってそのままスポッ。なんと、たっくんの左足の運動ぐつの中に入ってしまった。さすがに、ここは行き止まり。今度は、くつの中から出てこれなくなってしまうのです。

「なんてことだ。たいへんだ、たいへんだ！」

「とにかく、早く『め』を助けなければ！」

「もたもたしていたら、朝になってしまおう！」

この一大事に、文字たちはどなりあうように言いながら、運動ぐつのまわりにあわてて集まってきました。

そして、「よいしょ、こらしょ」と、なんとか『め』の文字を助け出しました。

それから、安心するまもなく、文字たちはものすごいスピードで、たっくんの部屋にかけこみました。あと三分おそかったら、起きてきたおかあさんと出くわすところでした。いえ、三分どころか、もっときわどかったかもしれない。

だって、目をまわしてよたよたしている『め』の文字を、両側からささえて走ったのは、おとなりの『む』と『も』。この『む』『め』『も』が、そろって表にもどってきたと同時に、ろうかを歩くおかあさんの足音が、パタパタと聞こ